

## 南丹医療圏域における病院の役割と今後について(令和6年2月時点)

医療機関名	亀岡シミズ病院	花の木医療福祉センター	亀岡病院	亀岡市立病院
許可病床数	177床(一般 132床、医療療養 45床)	152床(一般 152床)	108床(一般 108床)	100床(一般 100床)
主な診療科目 (上位3つ)	内科、脳神経外科、泌尿器科	小児科、精神科、児童精神科	内科、泌尿器科(透析)、整形外科	整形外科、消化器科、循環器内科
病床機能	急性期 56床、慢性期 119床	慢性期 152床	慢性期 108床、 介護医療院 90床(転換日 2019年10月)	急性期 80床、 回復期(地域急性期含む) 20床
主な病院機能	・救急告示病院 ・脳卒中(急性期、回復期、維持期)を担う病院	・障害児者医療に特化した病院	・在宅支援を担う病院(在宅療養支援病院) ・脳卒中(維持期)を担う病院	・救急告示病院 ・脳卒中(回復期)、 <b>がん、急性心筋梗塞等の心血管疾患(急性期～回復期)、小児医療</b>
新興感染症 における病院機能	・診療検査医療機関(外来医療) ・療養支援(感染症からの回復患者)	・特になし	・診療検査医療機関(外来医療) ・療養支援(感染症からの回復患者受入)	・陽性患者の入院受入医療機関 ・疑似症患者の入院受入医療機関 ・診療検査医療機関(外来医療) ・療養支援(感染症からの回復患者受入)
現状	・グループ病院と連携した脳卒中の受入 脳神経外科医 常勤3名 ・急性期病棟、障害者病棟、医療療養病棟、ケアマネ、在宅サービス(訪問診療・訪問看護・訪問リハビリ・小規模多機能)と切れ目の医療関係サービスを行っている ・新型コロナウイルス感染症対応(発熱外来、ワクチン接種) ・透析ベッドは、月水金:2クール、火木土:1クールで運用	・地域の発達障害にかかわる医療・福祉分野を担っている ・京都府下全域及び他府県の重症心身障害児(者)の入院施設	・令和4年度より全床障害者病棟として、慢性期医療を担っている ・訪問診療に関して、在宅療養支援病院として、地域の支援診療所と連携して対応している ・コロナ回復後の療養支援入院を受入れている	・急性期病床 80床、地域包括ケア病床 20床を運用中 ・新型コロナウイルス感染症対応(発熱外来、入院治療、ワクチン接種) ・訪問看護、介護予防訪問看護を運用中 ・救急医療対応
課題	・常勤内科医師の人員不足による救急応受率の低下 ・医師の高齢化 ・ <b>医療従事者(看護師、看護補助者、臨床工学技士、薬剤師など)の確保</b> ・ <b>眼科外来の閉診(2024.4～)</b> ・急性期病棟の活用 ・病診連携(逆紹介) ・ <b>病院の耐震化、スプリンクラー設備工事</b> <b>(2024.11月頃～約6か月間:一般58+障害34床を一時閉鎖予定)</b> ・機器の老朽化	・老朽化する病棟ライフライン整備 ・外来の発達障害診療依頼から初診までに待機期間が長期になっており、解消に向けた対策が喫緊の課題 ・発達障害診療において、診療報酬で収支均衡が取れないこと ・小児科、精神科、内科、整形外科医師の確保	・今後、増加する在宅医療を見据えて、地域包括システムに求められている医療・介護・福祉の連携強化を必要とする ・内科常勤医の確保 ・看護師の確保	・求められる医療体制に関わる医療資源(医療従事者や医療機器等)、財源の確保 ・ <b>救急応需の維持</b> ・設備の更新に係る財源確保 ・医師の働き方改革への対応(夜間救急等の当直も含む) ・タスク・シフト/シェアの推進(医療専門職種の法令改正への対応、業務の再構成など)
今後担う役割	・救急受入体制の充実 ・慢性期医療を担う病院として、高度急性期、急性期医療からの切れ目ない受入体制と施設介護、在宅医療への連携	発達障害児等への医療・福祉サービスの充実 在宅重症心身障害児(者)の災害時等の受け入れ体制の構築	・地域の慢性期医療機関として、各医療機関、施設と連携のうえ受入れ体制と介護事業サービスの充実	・整形外科疾患治療の充実 ・乳腺外科の継続 ・内科、外科救急への対応 ・医療設備、機器等の共同利用等(地域連携) ・新興感染症への対応 ・皮膚科、泌尿器科、眼科、神経内科など専門外来の継続(非常勤)
今後の展望	・レスパイト入院の受入 ・病診連携の充実(逆紹介の促進) ・透析ベッドの運用拡大 ・ <b>専門外来の充実(肝臓内科、腎臓内科)</b>	医療及び福祉分野の在宅支援への拡充展開 病棟改修	・透析ベッド数の増床と、リハビリ機能の拡充を目的とした増築 ・透析常勤医の充実 ・在宅サービス全般(診療、看護、介護、リハビリ)の強化。	・2025年に向けて、当該地域で効率的で医療資源を有効に活用できる医療体制の構築をすすめる。そのためには地域医療への役割、医療連携の推進等、社会情勢や医療環境に柔軟に対応できる体制を模索しながら、持続可能な地域医療サービスの提供を継続する ・医療～在宅までシームレスな医療サービスを提供するため、訪問看護ステーションを <b>運用</b> する

## 南丹医療圏域における病院の役割と今後について(令和6年2月時点)

医療機関名	京都中部総合医療センター	明治国際医療大学病院
許可病床数	464床(一般 450床(休床 52床)、結核 10床・感染症 4床)	114床(一般 114床)
主な診療科目 (上位3つ)	内科、外科、整形外科	内科、外科、整形外科
病床機能	高度急性期 46床、 急性期 301床、回復期(地域急性期含む)103床	急性期 23床、 回復期(地域急性期含む)37床、慢性期 54床
主な病院機能	地域医療支援病院、日本医療機能評価機構認定病院、地域がん診療病院、救急告示病院、急性期を担う病院(脳卒中、急性心筋梗塞)、回復期、維持期を担う病院(脳卒中、急性心筋梗塞)、第二種感染症指定病院、地域周産期母子医療センター、地域災害拠点病院、DMAT 指定医療機関、へき地医療拠点病院、京都府難病医療協力病院、京都府エイズ拠点病院、認知症患者医療センター、京都府地域リハビリテーション支援センター、原子力災害医療協力機関	・一般急性期病院 ・在宅療養支援病院 ・高齢者の生活の質の向上・改善・維持を担う、亜急性期病院
新興感染症 における病院機能	・陽性患者の入院受入医療機関 <u>(感染拡大に備えた確保病床 重症病床2床、中等症病床2床)</u> ・疑似症患者の入院受入医療機関 ・診療検査医療機関(外来医療)	・診療検査医療機関(外来医療) ・療養支援(感染症からの回復患者受入)
現状	・地域医療支援病院として、地域の医療関係者の方々との「顔の見える関係作り」を <u>推進し</u> 、診療所・クリニック等では対応困難な専門的な検査や高度な治療、手術及び救急医療等を行い、地域包括ケアシステムの中心的役割を担っている。 <u>(地域医療支援病院登録数122施設)</u> ・高度急性期・急性期医療では、がん診療、循環器・消化器診療など 31 診療科による高度専門的医療を提供するとともに、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟を活用し、円滑な在宅復帰を図っている。また地域の医療従事者への研修・教育を促進し、CT や MRI などの医療機器の共同利用を実施している。 <u>・新型コロナウイルス感染症が令和5年5月8日から第5類に分類されて以降も第二種感染症指定病院として、入院患者の受入れを継続しており、令和6年1月31日までの陽性者入院受入日数は延べ1417日である。</u> <u>・ダビンチシステムや人工関節手術支援ロボットシステムの導入により、技術的に困難であった手術も安全でスムーズに、また患者の負担軽減も図りながら執行できるようになった。今後も最新の医療機器を用いて、最高の医療が提供できるように努める。</u> ・臨床研修指定病院、新専門医制度の基幹(内科)・連携(内科以外の診療科)施設として京都府立医科大学と密接に連携しながら研修医・後期専攻医の臨床研修を行い、着実に実績を積み重ねることで若手医師のキャリアパス施設を担っている。	・過疎化が進む、日吉町、美山町、京丹波町を中心に、在宅医療も含め総合的な医療を担う病院としての位置づけ。常勤医 13 名と府立医大からの非常勤医師派遣等により、16 の診療科を標榜。地域の医療機関や介護施設とも積極的な連携を取っている。
課題	・ <u>今春から始まる「医師の働き方改革」を目前に控えて</u> 、地域の拠点病院として医療圏における医療需要に応えるために医師不足、診療科偏在に対応し専門医・専攻医や看護師・助産師等の人材確保を強化する必要がある。 <u>特に、看護師不足は大変深刻な問題であり、院内全体の問題として取り組みを始めている。</u> ・ <u>医師の適正な労働時間管理のため ICT を取り入れた労働時間の管理</u> や会議の効率化を行っている。更に、タスクシフト/シェアとして医療事務作業補助者の活用、看護師特定行為研修制度の推進、PBPM による持参薬の継続処方を行う薬剤師の配置など、 <u>幅広い多職種との連携を更に推進する必要がある。</u> ・ <u>地域の実情に応じた外来機能の分化・連携が求められており、地域の医療機関との連携・協議が必要である。</u> ・ <u>老朽化した施設の対策として、現在分散化している施設を新築工事等により集約化し、更なる高度な救急医療の提供と新型コロナ感染症の教訓から得た学びを生かした新興感染症に対応できる医療提供体制を構築する。</u> <u>しかしながら、建築資材や人件費の急激な高騰により、財政的な検討を余儀なくされており、将来における持続可能な経営基盤の強化策が正に喫緊の課題である。</u>	・常勤医(内科医、外科医、眼科医、麻酔科医等)の確保に苦慮しており、地域に医療需要はあるが、114 床のベッドが活用しきれていない状況。 ・薬剤師、看護師の確保にも苦慮している。 ・施設・設備の老朽化への対応。
今後担う役割	・ <u>新型コロナウイルス感染症を経験し、重症患者への対応を含めた病床設備や人的資源が不足した教訓を活かし、今後新たに発生する感染症への概念を一新した取り組みが求められている。地域医療支援病院・第二種感染症指定病院として平時と非常時の医療提供体制、人的支援の連携強化等の締結を目指す。高齢化が進む地域住民の皆様が健康寿命を延ばしてサクセスフルエイジングを達成できるよう地域完結型医療の推進と地域の医療水準の向上に貢献していく。</u> ・行政、医師会と協力し、地域災害拠点病院、へき地医療拠点病院として地域の災害や医療の提供体制に貢献する。	・地域の高度急性期病院と、地域の診療所や介護施設との橋渡しの役割を担う。 ・地域の医療ニーズ全般に応じるため、急性期から亜急性期、慢性期を含め、幅広い受入を行う。 ・在宅復帰の支援として、在宅診療、訪問看護、訪問リハビリ等を充実させる。
今後の展望	新棟を整備し、病院が目指す姿(コンセプト)は、“30年後も光輝く地域の拠点病院”であり、以下に当院が目指す基本的な考え方を示す。 1)地域住民の安全・安心を守る病院 ～南丹医療圏の砦として高度急性期機能・救急医療・高度専門医療・小児周産期医療を強化～ ～回復期機能・在宅支援機能の充実～ 2)地域医療連携の核となる病院 ～地域医療支援病院として地域包括ケアシステムの中心的役割を強化～ ～AI 技術を取り入れた ICT 化の促進～ 3)災害・感染症に強い病院 ～災害拠点病院としての役割を維持～ ～新興感染症への診療体制強化～ 4)やりがいを持てる魅力ある病院	・地域住民の健康寿命の延伸を目指し、寝たきりにならないためのリハビリ(入院・外来・訪問)を実践するため、セラピストの増員を図る。 ・高齢者施設との連携を強化し、当該地域で医療と介護が完結できる地域医療環境を構築する。 ・南丹医療圏の中で、各医療機関が単独で医療及び介護を展開していくのではなく、医療圏全体を捉えて、医師や看護師、セラピストなど全職種が、相互的に連携を取り合い、行政も巻き込みながら、地域住民を中心とした医療や介護を展開していく方法を、各医療機関の役割分担も含めて協議していきたい。

## 南丹医療圏域における病院の役割と今後について(令和6年2月時点)

医療機関名	国保京丹波町病院	園部病院	丹波笠次病院
許可病床数	47床(一般 47床)	60床(一般 60床)	85床(医療療養 51床、介護療養 34床)
主な診療科目 (上位3つ)	内科、外科、整形外科	整形外科、外科、内科	内科、外科、 <u>眼科</u>
病床機能	急性期 47床	急性期 60床	慢性期 85床
主な病院機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救急告示病院として、主に船井郡内の1次救急から2次救急の一部に対応している。</li> <li>・へき地医療拠点病院として、医師少数スポット地域である和知地域を医療圏にもち、同所にある和知診療所に外来医師を派遣し診療にあっている。</li> <li>・在宅支援病院として、船井郡内全域の在宅医療を担当し、訪問診療のみならず訪問看護・訪問リハビリ・訪問薬剤管理指導・訪問栄養管理指導も行っている。</li> <li>・(維持期)脳卒中患者の受入れを担う病院として、リハビリや外来・入院診療を提供している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救急告示病院</li> <li>・在宅療養支援病院</li> </ul>	
新興感染症における病院機能	<p>診療検査医療機関(外来医療)、療養支援(感染症からの回復患者受入)、その他の機能病棟が1つしかない医療機関である。感染症患者に対するゾーニングや看護体制の分割が<u>非常に困難</u>であるが、外来を一般外来と分離することは可能であることから検査及び外来診療を行うことは可能である。<u>軽症及び中等症Ⅰの患者が入院できる病床を2床確保している。感染者はここで入院管理し、他院において受け入れ期間が担えなくなった一般医療を当院でできる範囲で引き継ぐことや、感染症からの回復患者を一定期間当院で受け入れることも実践している。</u></p>	診療検査医療機関(外来医療)	
現状	<p>開業医の居ない当町において町内唯一の一般患者の入院を受け入れる公立医療機関として、外来診療と入院診療を実践している。更に、地域包括医療ケアを推進すべく、検診・学校医・健康教室などの予防医療を始め、介護が必要となった場合の施設での対応や、通院困難者に対する在宅医療の提供など、多岐にわたる機能を担っている。</p> <p>また、回復期患者の入院治療の<u>強化を図るため</u>、一般病床47床のうち、<u>令和6年度に地域包括ケア病床を14床から18床に増床</u>する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常勤医師 5名(整形外科 1名、外科 2名、内科 2名)体制</li> <li>・リハビリスタッフが比較的充実している(PT 16名、CT 1名)</li> <li>・在宅療養支援病院である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病棟、外来ともに慢性期医療を担っている。また、介護保険制度を利用した通所リハビリでは維持期のリハビリを行っている。</li> <li>・入院患者に関しては、急性期又は回復期の医療を終えられた方への入院の継続、施設入所の調整を行っている。</li> </ul>
課題	<p>医療不足が最大の課題となっているが、ただ医師を補充することだけで足りるわけではなく、地域で求められている総合診療医の確保が困難であることが現状の課題として挙げられる。</p> <p>また、常勤医不足を非常勤医に頼ることとなり、運営的には医療機能のバランス低下や経営的には人件費の上昇も招いている。</p>	・看護師(病棟)及び一部コメディカルスタッフの不足	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者世帯、独居高齢者のキーパーソンの所在等、行政・福祉サービスとの連携強化。</li> <li>・患者数の確保</li> </ul>
今後担う役割	<p>地域包括医療ケアを推進すべく、この地域の最前線の医療機関として役割を果たすとともに、後方の基幹病院との連携と役割分担を行うことにより、基幹病院における医療集中が緩和できるように努めることも同時に必要とされている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救急医療</li> <li>・在宅サービス(訪問看護、訪問リハ、訪問診療)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設・在宅での生活が困難な入院患者の受け入れ</li> <li>・外来、入院ともに慢性期医療の提供</li> <li>・地域の医療機関との連携</li> </ul>
今後の展望	<p>南丹医療機関の構成医療機関として地域の実情に応じた医療を提供し、地域包括医療ケアを推進していくことが当院に求められている。そのためにも総合診療医の育成と確保は必要であり、総合診療専門医プログラムや内科専門医プログラムに基づいた専攻医の受入れを始め、若い医師にも最前線の地域医療を経験していただくことや、地域医療に興味を持っていただける医師を、一人でも多く輩出できるように今後も務めていきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域包括ケア病床の有効活用</li> <li>・電子カルテの導入による情報共有及び患者サービスの向上 等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者や家族、そして地域の方々に求められる入院、外来、在宅医療、介護サービスを提供するための医療機関として地域ニーズの変化に対応したい。</li> </ul>